

氏名(本籍)	とも たり みかこ 知 足 美加子 (福岡県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博乙第2649号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	フランシスコ・スニガの彫刻観に関する研究 -ポストコロニアル的視座から-
主査	筑波大学教授 博士(芸術学) 中村 義 孝
副査	筑波大学教授 博士(芸術学) 守屋 正 彦
副査	筑波大学教授 柴田 良 貴
副査	田園調布学園大学准教授 博士(芸術学) 中原 篤 徳

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、彫刻家フランシスコ・スニガ (Francisco Zúñiga, 1912-1998) の彫刻観について、新たにポストコロニアル的視座から究明する試みである。特にスニガが制作した豊満な先住民女性像に焦点をあて、作品の独自性が移住地メキシコのポストコロニアルの状況下において、現状をありのままに受容する認識のあり方から生まれていると仮定し論考を行ったものである。本論はスニガが被植民地化された国々の現実を彫刻によつて的確に表現したことを再評価し、近代彫刻史における新たな重要性を示すことを目的としている。

(対象と方法)

本論ではまず、出生地コスタリカとメキシコの文化的差異がスニガに与えた影響や、移民としての彼の立ち位置に注視しながら、彫刻観を形成した文化的背景に着目している。次に彫刻作品の造形的特徴と彫刻観の概要を明らかにし、植民地以後のメキシコの社会状況との関係を明らかにした。また、彼が彫刻的な目標として現実感を重要視し、失明後もその彫刻観を貫いたことに関しても考察を深めた。日本国内においてはスニガに関する先行研究が殆どないことから、海外の文献及び講演録等の中から彼が述べた言葉を中心に翻訳し基礎資料としている。彫刻観と造形表現の関係については、彫刻制作者でもある著者の立場から、実見を重ねて作品分析をし、考察を深めている。

第一章では、コスタリカ時代のスニガが、キリスト教の宗教彫刻家だった父と、独学によって学んだ西欧近代彫刻の概念に影響を受けたことを論じている。スニガが先住民文化を客観的に捉えていたことを強調し、それゆえ実際のメキシコの先住民の現状とメキシコ革命時の芸術運動との間の意識のずれを強く感じていたことの論考を行っている。第二章では、メキシコ革命後の政治的芸術とプレイスパニック文化の関係について、スニガの視点と当時のメキシコ人達の視点の相違に留意しながら概要の整理を行い、古代彫刻が彼に与えた影響について、彼の言説と彫刻的特徴との関係をもとに分析を行っている。第三章では、政治的な芸術運動から距離をおいた1950年代以降の人体彫刻を中心に制作方法や作品分析を行い、彼の彫刻概念を明らかにしている。第四章では、スニガの彫刻観について、植民地時代以後の社会的枠組みから解釈を試みている。第五章では、視覚的・触覚的「記憶」と対峙した失明後の作品を分析し、晴眼時のスニガが重要視して

いた造形観と彫刻観が集約されていることを明らかにした。

(結果)

スニガは西欧文化とプレイスパニック文化をバランスよく組み合わせながらも、双方に完全に同化できないという複雑な立ち位置にあり、そのことが現実感を重要視する彼の姿勢を強めていったと著者は考察している。力強い作品に内在した憂愁を帯びた表現は、統合を切望しながらも断念せざるをえない植民地時代以後の社会を的確に捉えているのである。現前の人間に真に向き合うことで、スニガが社会的な深部を表現するに至ったことを本論は明らかにした。

(考察)

スニガが捉えた現実感とは、当時のメキシコ人達が「内面的な不安や葛藤を抱えながらも、地に足をつけ生き抜く姿」にあった。スニガの彫刻観の独自性は、現状をありのままに受容する認識のあり方にあり、植民地以後の葛藤を抱えながらも力強く生きる人間像を肯定したことにあると結論付けている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は植民地以後の文化的背景を鑑みながら、スニガの彫刻作品の造形的特徴と彫刻観における独自性を明らかにしている。スニガの研究において、ポストコロニアルの概念を彫刻作品分析に用いた初めての試みであると考えられ、分析の切り口の新鮮さが本論の特徴といえるだろう。造形論に加え、地域や人種といった新たな視点を導入し、スニガの研究に発展的貢献をした点は評価に値する。特に彼が重要視した「現実感 (realidad)」という概念については、被植民地化を経験した国々の文化観から考察しなければ、明確な解釈を得ることはできなかつただろう。スニガに関する日本国内の先行研究は殆ど存在していないため、海外の文献及び講演会記録等を自らが翻訳した資料や、遺族提供の資料、メキシコ国立人類学博物館やスニガのアトリエ、エスメラルダ美術学校などで実地調査を行い渉猟された資料などを基に考察されている。この点からもより信憑性を備えた研究として高く評価できるところである。今後は、本論の考察をもとにしたスニガの彫刻の造形的魅力について研究を深化させていくことが期待される。

平成 25 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。